



筑波大学で生まれた新しい科学技術を製品化する会社、ピクシーダストテクノロジー(東京)は、耳の聞こえない人でも音楽が楽しめる機器「サウンドハグ」を開発。音に合わせて球体が振動したり光ったりすることで、触覚や視覚で音楽を感じることができ、共生の可能性を広げるテクノロジーに期待がふくらみました。

耳で聞かない音楽!

茨城こども新聞 茨城新聞社

知り、学び、発信

「多様性と共生」チームには、こども記者11人が参加し、さまざまな観点から取材しました。取材の成果を発表し合った後、みんなで知恵を絞り、「どんな命も取り残さず、互いに認め合い、助け合って生きていくために私たちは知り、学び、発信し続けます」という提言をまとめ上げました。

互いに認め合う社会へ



目の見えない記者の取材とは

毎日新聞社の点字毎日編集部とオンラインで結び、目の不自由な人の暮らしなどを学びました。紙パックの牛乳にはくぼみがあり、他の飲料と区別できるようにしていました。他にも、さまざまな容器に点字がついていました。全盲の記者の方は点字で入力できる手帳や音声で文字を読み上げるソフトを使って取材していました。

毎日小学生新聞 毎日新聞社



ちがいを越え、助け合うために

信濃こども新聞 信濃毎日新聞社

親の都合で外国から移り住んだ子どもたちと長野県松本市で交流しました。日本語を学びながらの学校生活について聞き、言葉が通じない状態をゲームで体験しました。目の不自由なランナーを支える「信州伴走・伴歩協会(同市)」もオンラインで取材し、ちがいを乗り越え、みんなで助け合うことを考えました。

養蚕や農作業で成長



群馬県富岡市の「とみおか繭工房」では、さまざまな障害を持った人が養蚕や農作業に取り組んでいます。高齢化が進む地域の農家を支え、天然素材のシルク成分を使った製品開発などにもつなげています。障害者が生き生きと働き、成長し、活躍して地域の課題を解決する取り組みは、多くの人に伝える必要があります。

備えの大切さを実感



東日本大震災の教訓を生かし、災害に強い「防災環境都市」を目指す宮城県仙台市の取り組みを取材しました。大津波に襲われた仙台市立荒浜小を見学し、事前に備えることの大切さを学びました。仙台市の郡和子市長にもインタビュー。「子どもたちの声をまちぐくりに生かしたい。積極的に発言してください」と激励されました。

こども新聞 週刊かほびよんプレス 河北新報社



人も動物も共に幸せに

琉球新報小中学生新聞 りゅうPON 琉球新報社

沖縄県の動物愛護団体「琉球わんにゃんゆいまーる」は、人も動物も共に幸せに生きる社会を目指し、飼い主のいない犬や猫を助ける活動をしています。野良猫に避妊・去勢手術をして元に戻したり、飼っている猫がたくさん増えすぎて困ってしまった飼い主から相談を受け保護したり、ペットを最後まで飼うよう呼び掛けています。

女子のスラックス制服とパラスポーツ



新潟県の新潟大付属長岡中学校は昨年から、女子制服にスラックスを導入しました。多様性と共生の社会をつくる第一歩になると感じました。また、東京パラリンピック男子マラソンに出場した永田務選手「新潟県在住」にも取材しました。みんなが支え合えば、みんながやりたいことに挑戦できる社会をつくれると思います。

まいにちふむむ 新潟日報社

◇このページは、毎日新聞社が編集しました

わたしたちが取材しました

かわだ ひらり 河田 枚里 記者 (神奈川・小5)

あらい ゆいと 荒井 結人 記者 (長野・小6)

せい の とちひろ 清野 智優 記者 (宮城・小6)

ごとう ありさ 後藤 有咲 記者 (宮城・小6)

さくらい みらい 櫻井 みらい 記者 (宮城・小6)

なかつ みさと 中田 実里 記者 (茨城・小6)

くろだ きょうこ 黒田 京子 記者 (群馬・中1)

しのはら かな 篠原 香菜 記者 (新潟・小6)

しほや ひまり 渋谷 日向里 記者 (新潟・小6)

よした まこ 吉田 真子 記者 (長野・中1)

みやざと みらみ 宮里 陽 記者 (沖縄・中1)

不平等 気づいて変えよう

解決への道 記者が探る

「十分な学び」が大事

■夜間中学

今年4月に開校した北海道初の公立の夜間中学校を取材しました。家庭の事情や不登校などで中学校に行けなかった人や、戦争などで十分に学べなかった人が入学できます。



校長の工藤真嗣さんによると、札幌市内には義務教育を終えることができなかった人がおよそ2000人いるそうです。一人ひとりが学んで知識を身につけていくことが大事だと思いました。

私たちのチームは、7つの新聞社から10人の記者も記者が参加し、「不平等をなくすためにはどうしたらいいか」をテーマに考えました。

そもそも不平等とはどういうことなのか、不平等がなくなるとどうなるのか、ジャーナリストの池上彰さんに聞きました。

そして新聞社ごとに、貧困や男女の格差といった不平等をなくす取り組みをしている人たちにインタビューも行いました。

取材の結果、「『不平等かな?』と思うことを見つけたら、周りの人に伝える。そして、少しずつその不平等に気づく人を増やして、一緒になくしていく」とまとめました。

不平等って? 池上彰さんに聞く



Q. 不平等って何ですか? 不平等とはスタート地点が違うことです。例えば家が貧しい人は進学したくてもできない。で

もお金持ちだと進学できるというのは不平等ですね。誰でも勉強できるように、スタート地点を同じにすることが大事です。

食品寄付 必要な人へ

■フードバンク

日本では、まだ食べられるのに捨てられてしまう食品が年間約600万トンもあります。そんな食品を寄付してもらい、食べ物に困っている人や子ども食堂などに無償で提供します。



フードバンクうつのみや理事長の徳山篤さんによると、食べ物に困っている人に対して生活状況を聞き取ったり、その原因を分析したりして、適切な支援機関につないでいるそうです。

役に立つ「おさがり」

■上履きリユース

足が大きくなって履けなくなった上履きを新品同様にきれいにしてリユースする取り組みがあります。



鹿児島市にある「NAZUNA」では、学生服も補修やクリーニングをして安く販売しています。代表の東大介さんは「買い替えてできない子どもに、おさがりをつなぐことで、さびしい思いをさせたくない」と活動の意義を語っていました。

「クオータ制」意識変化

■女性が働きやすい社会

琉球大学付属病院の産婦人科医でこの病院初の女性教授となった銘苅桂子さんと、沖縄県北谷町議で初の産休を取得した宮里歩さんに取材しました。



会社の役員や議員のうち、一定の割合は必ず女性にする「クオータ制」があると知り、男女の不平等をなくし、女性が働きやすい社会をつくるため、一人ひとりの意識を変えていくことが大事だと思いました。

適正な値段 みんな幸せ

■フェアトレード

世界には豊かな国もあれば貧しい国もあります。そうした不平等をなくすための取り組みで「公正な貿易」という意味です。



外国から何でも安く買うのではなく、その国の人たちが生活できるように適正な値段で購入することです。NPO法人「アジア女性自立プロジェクト」の奈良雅美さんは「みんなが平等に幸せになれる取引という考え方」と教えてくれました。

女性活躍へ制度必要

■男女の格差

まだ日本で女性が働く環境が整っていなかった36年前に茨城県職員になり、活躍した石田奈緒子さんと、ジェンダーが専門の茨城大学の清山玲教授にインタビューしました。



日本は男女の格差を示すジェンダーギャップ指数が156か国のうち120位と低い順位でした。女性が活躍するためには家庭や職場などの理解や助け、制度が必要だとわかりました。

食事から支援につなぐ

■子ども食堂

子ども食堂は、子どもだけでなく、年齢や国籍に関係なく誰でも行ける場所です。ご飯を安く食べたり、遊んだりすることができ、全国におよそ6000か所もあります。



子ども食堂を支援している社会活動家の湯浅誠さんは、「地域のにぎわいづくりにもつながり、困り事がある人に気づいてサポートにつなげる役割もある」と説明してくれました。

◇このページは、読売新聞社が編集しました

わたしたちが取材しました



高口 隼颯
記者
(千葉・中1)



伊東 咲希
記者
(東京・小6)



實吉 孝宗
記者
(北海道・小6)



安田 結
記者
(茨城・小6)



小林 淑佳
記者
(栃木・小6)



岩崎 実結
記者
(兵庫・小6)



梶原 真那
記者
(鹿児島・中1)



田代 あい
記者
(鹿児島・中1)



坪山 侑世
記者
(鹿児島・小6)



平良 光祈
記者
(沖縄・小6)

すべての生き物が共存する世界を

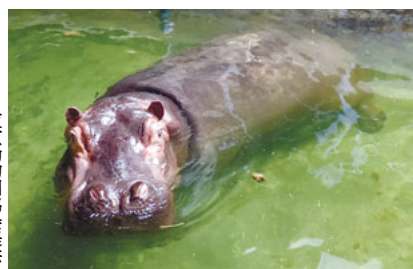
私たちは6人のチームは、日本環境教育フォーラムの鴨川光さんを「先生」として招き、地球環境について考えるワークショップを開きました。そのなかで、人間が住んでいる資源が、地球全体で見ると、ごくかきられた陸や海にしかないことを学びました。

貴重な地球環境を守るため、みんなに行動してもらおうにはどうしたらよいか。鴨川さんは、まず「目標めざす社会」を考えることをすすめてくれました。私たちは各地で取材してきた成果を持ち寄り、めざす社会について話し合いました。

地球のためにすべきことは

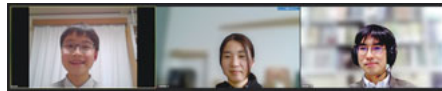


- ① すべての生き物が共存する世界
 - ② むだづかいをしない社会
- この目標をもとに、こども新聞サミットではこんな提言を発表しました。
- すべての生き物と自然が共存する世界をめざし、自分のため、地球のために、身の回りのむだづかいをやめよう
 - もっと地球や生き物の特徴を知り、みんなにも広め、何をすべきか考えて毎日取り組もう
- 一人ひとりができることに取り組む、仲間を増やし、努力し続けることが大事というメッセージをこめました。



東京動物園協会提供

動物園で本物を知る



東京都台東区の上野動物園をオンライン取材しました。園にいる動物たちのふるさとには世界の暑い地域や寒い地域とさまざま、東京で暮らすには冷房や暖房、水を多く使わなければなりません。そのためSDGsに反しているようにも見えます。

しかし、生き物たちのことを知り、彼らのために何ができるのかを考える上で、動物園は欠かせない存在です。本物を見て、感じて、一人ひとりが考えること。それが地球全体のSDGsにつながると感じました。

食べられるカップで使い捨て減らそう

茨城県守谷市に研究所があるアサヒビールが、愛知県の丸製製菓と共同開発した食べられるカップ「もぐカップ」は、お菓子なので、ごみになりません。水に強く、キャンプなどに最適。パナソニックと開発した「森のタンブラー」は、主な原料が植物繊維です。「プラスチックのカップ代わりに使って、使い捨てを減らそう」と思いました。



プラごみ削減へ「不要なものは買わない」



環境問題について体験学習できる愛媛県松山市の「Re・再来館」の昨年度テーマは、便利な使い捨てプラスチック。地元の海もプラごみに汚染されていました。一方、愛媛の製紙会社などはプラに代わる自然由来の製品開発を進めています。プラごみ削減へ不要なものは買わないなど、私たちができることは何かを考える機会になりました。

環境問題について体験学習できる愛媛県松山市の「Re・再来館」の昨年度テーマは、便利な使い捨てプラスチック。地元の海もプラごみに汚染されていました。一方、愛媛の製紙会社などはプラに代わる自然由来の製品開発を進めています。プラごみ削減へ不要なものは買わないなど、私たちができることは何かを考える機会になりました。

町全体で脱炭素社会めざす



福島県浪江町では原発事故をきっかけに、再生可能エネルギーの発電所や水素エネルギーの研究施設などがたくさん作られました。町全体で脱炭素社会の実現に取り組んでいます。大切な地球環境を守るためには、みんなが自分にできることに今すぐ取り組むことが大切で、その積み重ねが目標とする未来を作る、と実感しました。

絶滅とは「二度と会えなくなること」

岡山県環境学習センター・アスエコ(岡山市)で「絶滅しそうな昆虫たち」展を取材しました。アスエコの山田哲弘所長から、人間の環境破壊や乱獲のせいで、姿が消えそうな昆虫が増えていることを学びました。山田所長の「絶滅」というのは、その昆虫に二度と会えなくなること」という言葉が、とても心に残りました。



森とふれ合い里山守る



私たちに身近な自然である「里山」を守る取り組みを取材するため、福岡市・南公園の森のボランティアのみなさんの活動に参加しました。見通しをよくするため、不要な木の枝などを切って手入れし、土砂崩れを防ぐ「土留め」を作る作業を体験。キノコや虫のことも教えてもらいました。森を知り、ふれ合うことも保全活動につながることを学びました。

◇このページは、朝日学生新聞社が編集しました

わたしたちが取材しました



野本 承助
記者
(東京・小5)



ひろの たける
記者
(福島・中1)



りくのり そら
記者
(茨城・小5)



おかもと こうせい
岡本 康誠
記者
(岡山・小6)



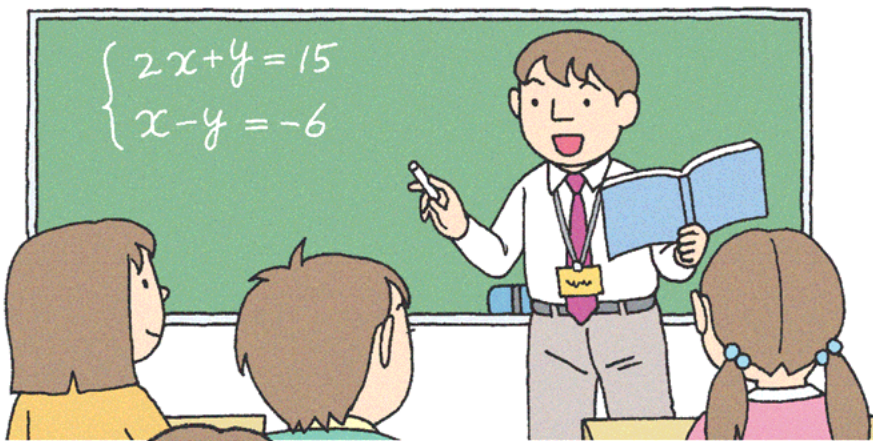
やまもと りな
山本 楓華
記者
(愛媛・小6)



はたもと めい
幡本 芽生
記者
(福岡・小5)



ロンドン・ビジネススクール教授のリンダ・グラットン氏によると、今の小学生の平均寿命は100歳を超えるとされています。大学を卒業してから80年から90年も生きていくこととなります。



自分で問題設定をして、自分の知識や経験を駆使し、適切な答えを導ける力を身につけよう

これだけ長生きをしていくということは、小学生のうちから基礎学力をつ

けるとともに、大人になっても必要とされる力を身につけることが、とても大事になってくると思います。それではどんな力が必要とされるのでしょうか。未来を予測することが難しい21世紀の社会では、自分で問題設定をして、自分の知識や経験を駆使し、適切な答えを導ける力が、大人になつてからも必要な力となってきます。



このために、教科書で習う勉強だけでなく、読書や新聞で身につく幅広い教養が大切につ

なつてきます。小学生向けの新聞は「なぜだろう」ということがとてもわかりやすく丁寧に説明されています。知識が多いことに越したことはありません。これからも新聞・本にぜひ触れてください。



株式会社浜学園経営企画部長 数 孝昭

浜学園の通塾スタイルを家庭で再現

最高峰の自宅学習システムで難関中学合格 浜学園Webスクール 🔍

＼ここがすごい！ 浜学園のWebスクール /

- 短縮版ではありません** 動画は授業そのまま ※編集加工はしています。
- 高品質だから臨場感がすごい** 業界最高水準の映像生成・配信技術
- ご家庭の負担はありません** テストは実物を郵送します

■進学教室 浜学園 **小1~小6**
 ☎0798-66-5110 関西・東海・沖縄に45教室展開
 ■駿台・浜学園 **小1~小6**
 ☎03-5283-7774 東京・神奈川に6教室展開
 ■浜学園Webスクール **小1~小6**
 🌐 <https://hamagakuen-webschool.jp/> ご自宅で受講



株式会社 ロボット科学教育 [クレファス] **crefus**

皆さんの発表を見ていて私も皆さんと同じ年代の時に校庭で経験したことを、ふと思いつきました。まず円の直径だけを決め、一人が円の中心でヒモの端を固定します。もう一人はそのヒモの先に木の棒をつけてグルッと360度回って大きな円を描きます。公式から直径×円周率(3.14)で円周を求めるのですが、この計算上の数値と描いた円の円周が本



「こども新聞サミット」を拝見させていただきました。SDGsって小学生には難しいのではないかとおもうのですが、こども記者の皆さんがそれを一生懸命理解した上で取材をして、その結果をまとめていることに大変おどろきました。

実体験の積み重ねが、イノベーションを起こす力になる

うまくいくと思ったプログラムをロボットにダウンロードして動かすと



クレファスのカリキュラムの中にも、無駄なゴミを減らすにはどういう取り組みが必要なのかなど、SDGsの目標となるような課題がたくさんあります。私たちも実体験を大切にして、自分の手を使った実験でも、目で見て学ぶことが出来ますが、自分の足を使って取材しに行き、調査したことに理解したことは皆さんの身になっていくことだと思います。

当に合っているのかどうか調べる実験をしたことがあります。

皆さんは今後、持続可能な目標を達成するための中心となる人材です。より良い世界を作るために、みんなで考えるだけでなく、「地球の未来、みんなで肩組み考えよう!」、簡単そうに見えて実は難しいスローガンではあります。みんな協力し合いながら達成していきましょう。

うまいかないなんてことがよくあります。やってみたり調べてみると予想とは違ったりする、そういう問題点を今回のような経験を通して解決できる人になってほしいと思います。今後社会において、自分以外の人に調べたことなどを伝える力、また、そこから周りを巻きこんでイノベーションを起こす力が必要になっていきます。記者でも研究者でも分かりやすく伝えることや、より革新的な解決方法を見つけることが今後必要な能力になってくるかと思っています。



岡崎 大介
ロボット科学教育 Crefus 学園長



プログラミングをはじめよう! **クレファスの夏期プレスクール!**

入会金 80% OFF!!

夏期プレスクールってなに?

「この夏から始めてもCrefusの授業についていけるかなあ...」

そんな不安を解消し、基礎を固める準備講座。

この夏から入会したい!そんなみんな向けの講座が『夏期プレスクール』なんだ!

キックス **Kicks コース** (小学1年生・2年生)

レスキューカーを作って動かそう!
ドキドキ!わくわく!の全4回!!
先生と一緒にロボット作ってプログラミングで動かそう!
ロボットはうまく動くかな?
プレスクールの終わりには自分だけのレスキューカーが完成!
プレスクールから始めれば、
夏休みの授業からはひとりでも大丈夫だね!

【時間】50分/1回 【回数】全4回(2回×2日間)
【開催期間】7月末~8月上旬 ※詳しくは各教室へお問い合わせください

クレファス **crefus コース** (小学3年生~中学3年生)

プログラミング・ロボット製作が初めてでも安心して学べる準備講座だよ!
実際にキットを使って色々なものを作ったり動かしたりしながら進んで行くので、
90分の授業でも集中して楽しく取り組むことができるよ!
プレスクールで基礎を身につければ、
夏休みの本コース授業からも安心して始められる!

【時間】90分/1回 【回数】全6回(2回×3日間)
【開催期間】7月末~8月上旬 ※詳しくは各教室へお問い合わせください

まずは**体験授業**に行ってみよう!キックスコースではボールを飛ばすロボットなどを作るよ!クレファスコースでは車型ロボットでミッションにチャレンジ!

ロボット科学教育 **crefus**

メール info@crefus.com 受付時間 火曜~土曜 10:00~18:00

0120-610-419

東京都江東区豊洲4-2-1 2階 <https://crefus.com/>

体験申込は **こちらから!**

詳細はコチラ



Kicks: 小学1年生・2年生
Crefus・e-crefus: 小学3年生~中学3年生

夏期プレスクール年長向けも申込受付中!





SDGsこどもユニットの「ミドリーズ」が登場!



今回の「こども新聞サミット」には、スペシャルなゲストが登場しました。SDGsこどもユニット「ミドリーズ」です。NHKのSDGs番組シリーズ「ひろがれ! いろとりどり」のマスコトキヤクターとして注目されている5人のメンバーが、こども記者たちの発表に感想を寄せたり一緒にダンスを踊ったり、サミットを大いに盛り上げてくれました。

「ツバメ」の生パフォーマンズで盛り上がりました!

昨年10月から放送されている、SDGsを楽しく学んでいくNHKの番組シリーズ「ひろがれ! いろとりどり」。そこで視聴者の人気を集めているのが「ミドリーズ」。昨年の紅白歌合戦にも出演したことで認知度も急上昇! 番組内では「Y O A S O B I with ミドリーズ」としてテーマソング「ツバメ」をパフォーマンスしています。

サミットで司会者が「ミドリーズ」を紹介すると、ディスプレイの向こうからこども記者たちの歓声が聞こえてくるようでした。

5人はこの春の進級を前に、新しく挑戦したいことを元気に発表した後、チーム発表にのぞむ記者たちを勇気づけるように、「ツバメ」を披露。ハツラツとした5人の軽快なダンスと歌による生パフォーマンスはサミットの空気をさらに盛り上げました。



レクシー

りりな

ミドリーズもみんなと一緒にすてきな未来をつくっていく!

サミットはチーム発表に続いてまとめの会議に進み、今日学んだことや見えてきた新たな課題について、多くの意見が飛び交いました。白熱した議論をずっと見守っていた、ミドリーズのリーダーあつきは、サミットの感想について次のようにコメントしました。

「今日はみなさんのいろいろな考えや意見を聞くことでたくさんの気づきがありました。ぼくもより良い世界をつくるために、

「地球の未来 みんなで肩組み考え動く!」が大切だと思いました。みんなで一人ひとり自分たちのできることを少しずつやっていきたいと思います。ぼくたちミドリーズもこれから番組やイベントで「ツバメ」をはじめとしたSDGsに関する歌を歌って、たくさんの方と一緒にすてきな未来をつくっていくんだという気持ちを分かちあっていたいと思っています」。

最後にみんなで「ツバメ」ダンスを一緒に踊りました!

提言が決まった後で、「ツバメ」

ダンスの振り付けでみんなで踊るお楽しみが待っていました。メンバーが直々に振り付けを教えてくれて、さあ準備はOK。ミュージックスタート! ミドリーズと一緒に全国のこども記者のみんなが、より良い未来を願いながら、楽しく踊ることができました。メンバーから「今日はリモートでしたが、みなさんと「ツバメ」を踊れて楽しかったです! 次回はミドリーズがみなさんのところへ行きますから、ぜひ顔を合わせて踊りましょう!」とメッセージが送られました。



最後にみんな一緒に「ツバメ」を決めて記念撮影。はい、ポーズ! 最高の笑顔で締めくくりました。ミドリーズのみなさんありがとうございました!



NHK for School の動画を見て SDGs かるた をつくろう! 募集中!

STEP 1 短い動画でSDGsを知る

NHK for Schoolの「ひろがれ!いろとりどり」のホームページに!



「17の目標別動画クリップ」で興味のある目標を選び、学んだら...

STEP 2 川柳と絵札をつくって応募

12 ちり紙筆 キャップを使えば まだ書ける! あつき(10)	5 友情は 見た目のないよ ハートだよ レクシー(8)
17 目まぐるしい みんなであっけい がなはろう ゆめり(11)	11 たすけあい おこまりですか かことさ りりな(9)

STEP 3 ユニークな作品はEテレで放送

送ってくれた作品は、「ひろがれ!いろとりどり」ホームページですべて紹介

ユニークな作品は、月間賞として表彰します

子ども向けSDGs番組 **あおきいろ** のなかで全国放送!(Eテレ 金曜よる6:24)

NHK おうちでも! 学校でも! 個人はもちろん、学校単位での応募もお待ちしております。応募用紙や応募についてはこちらから <https://www.nhk.or.jp/irotoridori/karuta/>



(先生方へ) 学校・クラス単位での参加をご希望の場合は、karuta@nhk-sc.or.jpへご連絡いただくと、ご参加いただく人数分の応募用紙(SDGsについて学べる冊子)を無料でお送りします。



ゲストの感想

みんな笑顔の「最終提言」

関口修司

日本新聞協会 NIEコーディネーター

緊張のスタートでした。子ども新聞サミットでは、子ども記者のみならずが取材して調べたことを堂々と発表し、「最終提言」にまとめました。まとめをお手伝いした私も、ぶっつけ本番でドキドキの連続でした。

さて、どうやって「最終提言」にまとめられたかを振り返りましょう。みなさんから「考える」の言葉が出てびっくり。ただ行動することが目的ではない学びをしてきたことが分かりました。当日までに作った「SDGs かるたの言葉」や「チームの提言」にも、おどろきのキーワードがいっぱい。一つにまとめられるか不安でした。

まずは「だれが」「何を」「どうする」に分類して整理しました。「だれが」に当たる言葉は「みんな」「一人一人」など。ここでは、全員で取り組むことを重視して、「みんな」で決めます。

「何を」は「自然」「差別」「ちがひ」など。この三つは今の地球上の出来事なので、「地球の未来」に決まりました。

大変なのは「どうする」。たくさんさんの言葉が出されました。そこでみなさんと、言葉の仲間分けをしました。選ばれた言葉は「考える」「行動する」「続ける」「肩を組む」でした。

言葉をつなげると、「みんな」で肩を組む、地球の未来を、考えて行動し続ける。みなさんの思いが一つの言葉になりました。最後に仕上げです。さらに短くして並び替え、最終提言「地球の未来、みんなで肩組み、考え動く！」が完成。画面にみなさんの拍手する姿が映りました。

【プロフィール】1955年生まれ。東京学芸大学卒業後、東京都公立小学校教諭に。社会科とNIE(新聞教育)を中心に研究し、91年から17年間、群馬大学教育学部非常勤講師も務めた。2004年度から東京都北区の3小学校の校長を歴任し、16年3月定年退職。日本新聞協会NIEコーディネーターに就任。現在、東京未来大学で非常勤講師も務める。



いろいろな生き物と手を取り合って、ともに生きていこう

佐藤正和

NHK Eテレチーフプロデューサー

NHKの教材動画配信サービス「NHK for School」では昨年秋から「SDGsかるた」というワークショップ教材を提供しています。これは、サイトでSDGsの17目標に関する動画を見て、そこで学んだことを川柳と絵札にして、自分だけのかるたを作り、その作品をNHKに投稿してもらおうと、ホームページで紹介し、今回のこの記者の皆さんにもチャレンジしていただきました。皆さん、興味を抱くSDGsの目標もさまざま。どの課題に対して、どの当事者意識を持ったメッセージを発信してくれて、本当に感動いたしました。「私はこんなふうに世界を良くしていきたい!」「ぼくは未来のためにこんな行動をしたい!」といった想いを



川柳と絵で表された「SDGsかるた」は、皆さんの未来への決意表明とも言える作品群になったと思います。そして、これらの作品に共通して感じたことは、「いろいろな生き物と手を取り合って、ともに生きていこう」ということでした。自分のまわりにいる人、動物、植物の存在を否定したり、無理やり思い通りにしようとするんじゃないかと、相手の個性や生き方を認め、いい距離感でも生きていく。そうしていくことで、皆さんが思い描く未来が実現していくんじゃないかなと思います。最後に、子どもユニット「ミドリーズ」と皆さんと「ツバメ」を歌い踊ったあの時の連帯感と高揚感をいつまでも忘れずにいたいと思います。

【プロフィール】子どもたちの想像力をはぐくむべく、「よく見て、よく感じ、よく考えること」をテーマにした番組を企画制作しています。NHK Eテレの子ども向けSDGsの番組「あおきいろ」や、SDGs番組シリーズ「ひろがれ! いろとりどり」も担当。

子ども新聞サミット Children's Newspaper Summit

子ども新聞サミットは、全国の子ども向け新聞・紙面の読者が「子ども記者」として社会の動きや問題取材した上で、自分たちの未来がどうあるべきかを議論し、提言にまとめるイベントです。2017年に始まり、新型コロナウイルスの感染拡大で中止となった20年をのぞいて毎年実施しています。

「よりよい世界をつくるためには」「だれもが仲良く暮らせる社会」「人と動物の共生」――議論のテーマは、簡単に答えの見つからない、手ごわい問題ばかりです。

自分たちなりの答えを見つげようと、子ども記者は取材に向かいます。これまでのサミットでは、北極や南極を探検する冒険家、オーケストラの演奏者を取りまとめるコンサートマスター、オリンピックの金メダリ

ストなど様々な分野で活躍する人たちから専門家ならではの鋭い意見を聞き、考えや理解を深めるためのヒントをもらってきました。

取材の成果をまとめ、発表する場となるのは、東京都江東区の日本科学未来館。今年は感染防止のため、昨年に続いてオンラインで開催しました。中継拠点となった会場では、全国からインターネットでつながった子ども記者たちの意見が飛び交い、例年と変わらぬ活気にあふれていました。

「つながる子ども新聞」は、こうした取り組みをまとめたものです。この新聞を手にとった人が、自分でも問題を考え、友だちや家族と話し合うきっかけにできれば、という思いで発行しました。

子ども新聞サミット実行委員会